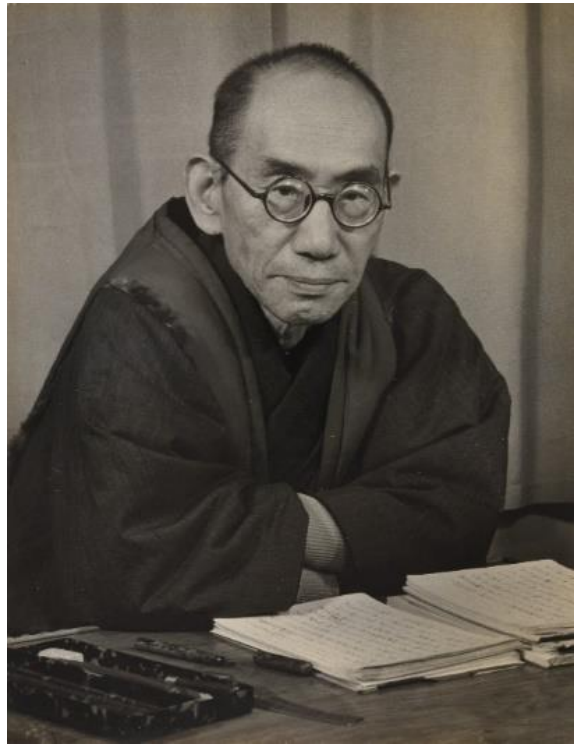
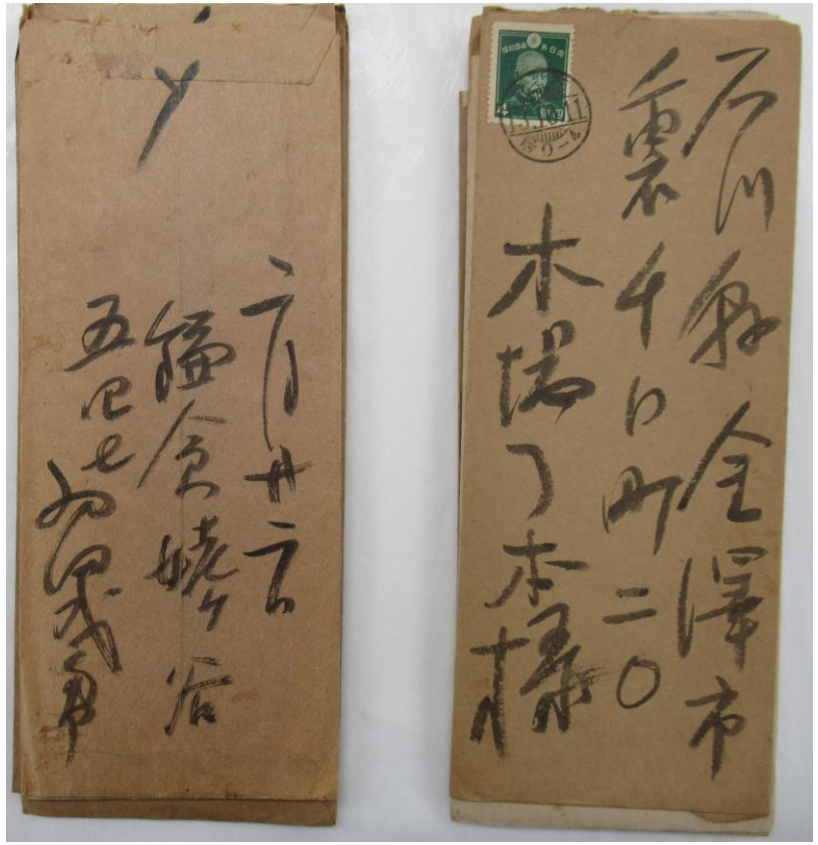
哲学寺子屋 in 小矢部西教寺

西田幾多郎「善の研究」と木場了本・深定との関わり

◆日時　5月12日(金)午後5時30分　◆場所　小矢部市末友「西教寺」御堂



1870(明治3)年―1945(昭和28)年



1885(明治18)年―1940(昭和15)年

石川県西田幾多郎記念哲学館館長　浅見　洋

Ⅰ．私と木場深定先生との出会い

1．1973年頃：卒業論文を書くためヘーゲル『宗教哲学』木場深定訳、岩波書店、全集第15-17巻、1950-1959に触れる。

・改版「全集 第15・16・17」岩波書店 1982-1984 新版1995、単行版2003

【著書】
『真理と実存 ハイデッガーの真理論』福村書店、ロゴス新書〉、1948
【翻訳書】
・カント著作集 第17 教育学其他』阿部・金子共訳、岩波書店、38
・ニーチェ『道徳系譜学』岩波文庫、40、改題『道徳の系譜』64、2010
・シュライエルマッハー『独白録』木場了本共訳、岩波文庫、43
・『ハイデッガー選集 第11 真理の本質について・プラトンの真理論』理想社、61、『第19 カントと形而上学の問題』理想社 1967
・ニーチェ『善悪の彼岸』岩波文庫、70、改版2010
・『ハイデッガー選集　第27 物への問い』理想社、79

木場深定（1907－99）

ドイツ近現代哲学の主要な哲学者の翻訳者として、日本の哲学の発展に功績があった。

私の今日の考が多くのものをヘーゲルから教へられ、又何人よりもヘーゲルに最も近いと考へると共に、私はヘーゲルに対して多くの云ふべきものを有つて居るのである。（⑦277）

博論「ヘーゲル宗教哲学の研究 特に宗教的意識と哲学的思惟との関係について」（1962）

西田は自身の論文の中で多くの哲学者に触れているが、なかでもカントに関する言及が最も多く その数は 500 箇所余あるといわれている。（木村美子、2010、254）

20世紀最大の哲学者・ハイデッガー、若者に人気の哲学者・ニーチェ、近代（自由主義）神学の先駆者・シュライエルマッハー

シュライエルマッヘル『独語録』東亜書房、木場了本訳、1915⇒シュライエルマッヒャー『独白録』了本・深定共訳、岩波文庫、1943⇒ シュライエルマッヒャー『独白録』木場深定訳、岩波文庫、1952⇒『独り語る』深定訳、理想社、1980⇒シュライエルマッハー『独白』深定訳、岩波文庫、1995

＊深定は繰り返し翻訳の改訂版を出した。⇒思索者、研究者の資質

この翻訳はもと『シュライエルマッヘル　独語録』と題して大正三年の五月から十二月まで雑誌『精神界』に分載され、ついで大正四年の十月に東亜書房から単行本として出版されたものである。その後、原訳者は訳文に不満を感じて改訂を志し、その筆を起こしたことも一再ではなかつたが、いつも余事に累はされて果さず、つい長らく絶版のままにしてゐたのであつた。しかるに一昨年の秋、原訳者は思ひがけない急症のため遽に他界し、従つてこの翻訳の訂正のこともまた、他の若干の未完成の労作とともにそのまま後に残されることになつてしまつた。

原訳者の没後まもなく、私はせめて霊前へのささやかな手向けにもと思つて、まずこの改訳の仕事に手をつけた。しかし、訳稿の完成その他に予想以上の日子を費し、このほどやうやく上梓の準備を終つてこの改稿への序を草しうるに至つた。

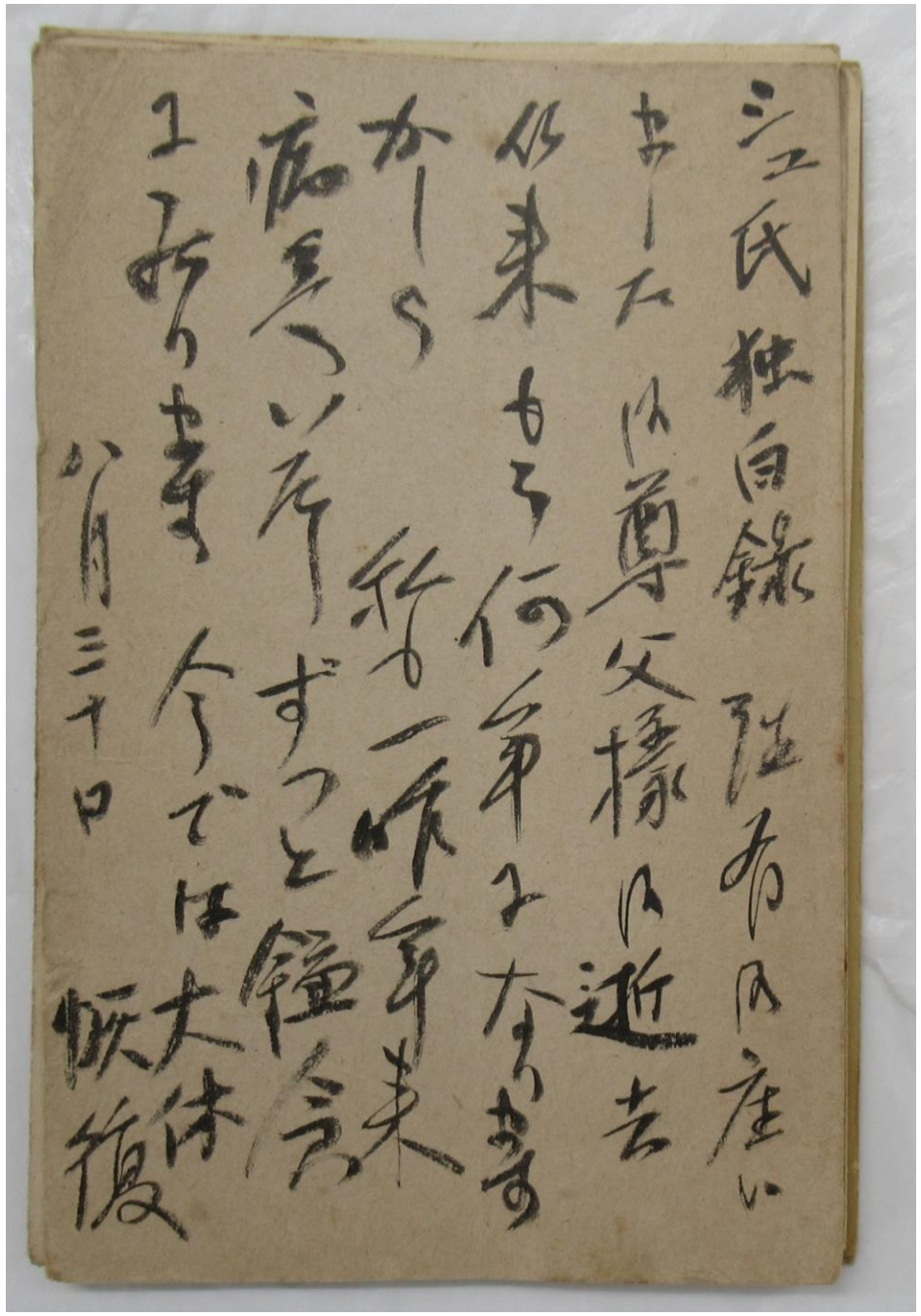
それにしても、かやうにしてここに上梓されようとする改訳の結果が果たしてあらゆる意味で原訳者の改訳の意思に副ひえたものであるかどうか、ーそれは今となつては慥かめる由もないことである。今はただ、この訳書をともあれ新しい形で再び世におくることによつて、みづから風樹の歎を慰めようとするにすぎない。・・・

昭和十七年十一月二日　亡父三回忌の逮夜に　　木場深定

―『独白録』木場了本・深定共訳、岩波文庫、1943、3-4「改訳への序」―

西田幾多郎の木場深宛葉書
（一九四三年八月三日
松山市内道後宛

シュ氏独白録　難有
御在いました　御尊
父御逝去
以来もう何年になり
ます
かしら　私も一昨年
来
病気いたし　ずつと
鎌倉



木場さんのお父さんは木場了本さんといって、富山県のお寺の住職をしながら、西洋哲学の勉強をした人で、西田幾多郎さんたちと交流があったようです。家にお父さんののこした本がたくさんあるので、もったいないから哲学をはじめたんだろう･･･。テキストだけはじつに正確に読みました。（木田元『闇屋になりそこねた哲学者』ちくま文庫、2020、99-100）

2. 心理学者・木場深志先生との出会い（1992年頃？）

木場深聴

↓

木場了本（哲学・宗教学）　大谷大学教授　第四高等学校教授

↓

木場深定（哲学・宗教学）　東北大学教授　大谷大学教授

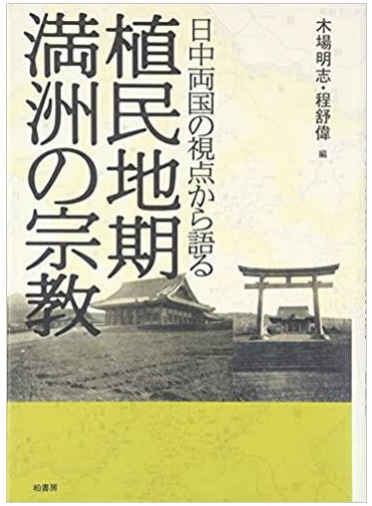
↓

木場深志（心理学）

金沢大学保健管理センター
（学生相談、MMPI）
金沢学院大学教授

父が西田先生からの祖父宛の手紙を整理している。お寺は弟が継いでいる（深志先生談）

大崎（木場）知恵



木場明志（歴史学）

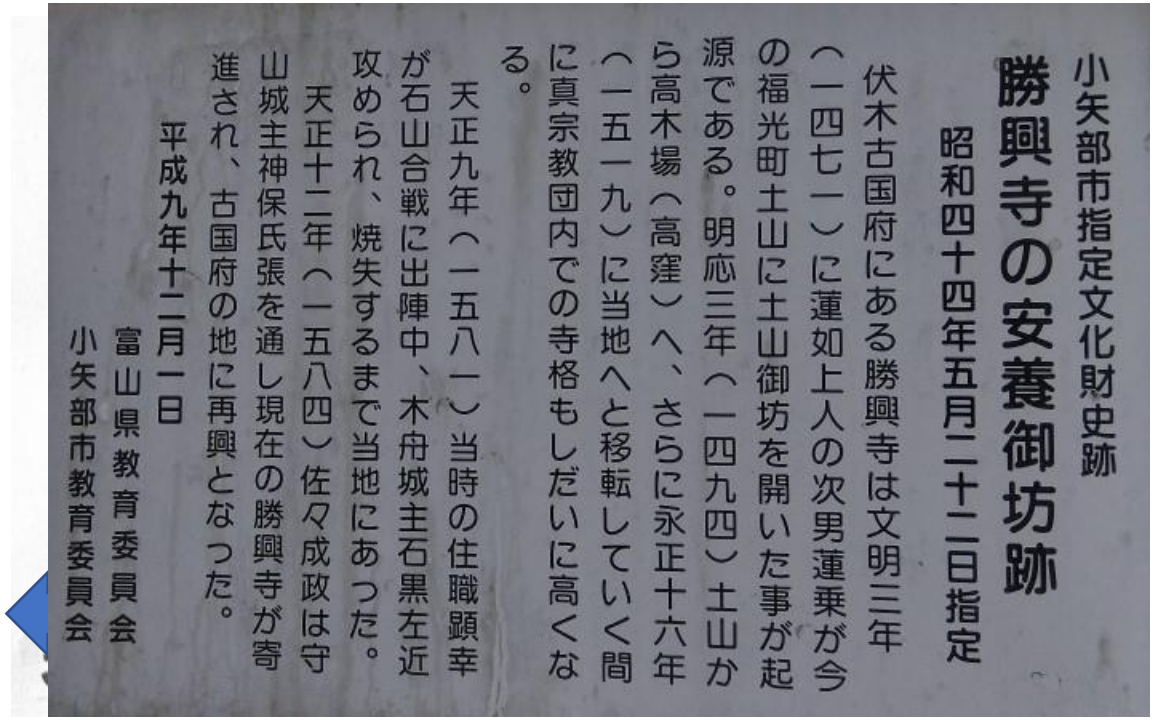
大谷大学文学部教授
宗教史学、宗教学
（日本宗教学会維持会員）

3. 西教寺訪問と資料調査

①With CORONAの広がり→木場了本資料の調査がしたい。
②末友の野澤敏夫、哲学館運営委員長谷本亙両氏来館
③西教寺資料調査
　西田幾多郎関係資料の確認→新聞報道→哲学寺子屋開催

勝興寺の前身は末友にあった

土山御坊（南砺市指定史跡）



小矢部市指定文化財史跡
勝興寺の安養御坊跡
昭和四十四年五月二十二日指定

伏木古国府にある勝興寺は文明三年（一四七一）に蓮如上人の次男蓮乗が今の福光町土山に土山御坊を開いた事が起源である。明応三年（一四九四）土山から高木場（高窪）へ、さらに永正十六年（一五一九）に当地へと移転していく間に真宗教団内での寺格もしだいに高くなる。

天正九年（一五八一）当時の住職顕幸が石山合戦に出陣中、木舟城主石黒左近攻められ、焼失するまで当地にあった。

天正十二年（一五八四）佐々成政は守山城主神保氏張を通し現在の勝興寺が寄進され、古国府の地に再興となった。

平成九年十二月一日
富山県教育委員会
小矢部市教育委員会

勝興寺安養寺御坊後
（小矢部市指定史跡）

雲龍山勝興寺（国宝）

一向衆の拠点安養寺御坊と真宗の宗門改革運動の中心的な働きをなした浩々洞のメンバー木場了本に通底するもの？

Ⅱ．木場了本について―西田幾多郎との関係を中心に

１．『善の研究』の成立期における了本

- 1885（明治18）年1月3日：埴生村蓮沼の光明寺住職家山等倫の次男として生まれる。
- 1905（明治38）年3月　県立高岡中学校卒、北蟹谷村末明の西教寺住職の養子となる。
- 1908（明治41）年7月　第四高等学校卒業

1906年7月四高卒業生

大橋八郎（1885-1968）本町、高岡中、石川県尋常中、四高、東大、日本放送協会第4代会長

1907年7月四高卒業生・・・西田の「倫理」の講義を印刷⇒『善の研究』2，3編の原本

河合良成（1886-1970)福光、高岡中、四高、東大、小松製作所会長

正力松太郎（1885−1969）枇杷首村、高岡中、四高、東大、読売社主

品川主計（1887−1986）福井中、四高、東大、ジャイアンツオーナー

河合良成

大橋八郎

正力松太郎

高岡市名誉市民
（昭和40年6月18日）

西田先生の倫理学の講義は、私にはひじょうにおもしろかったが、クラスの連中には難解だというので困ってしまって、いよいよ試験が間近に迫ったとき、多くのものから級長をしていた私に向かって 「西田先生の講義原稿をもらってきて、それをプリントして皆に分配せよ」という要望があった。（河合良成）

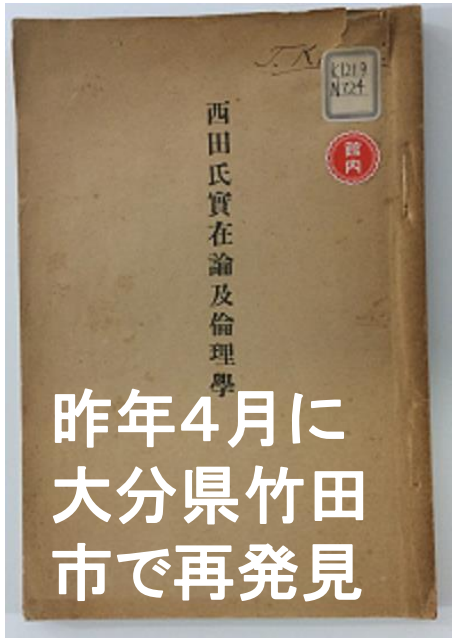
1906（明治39）年12月に『善の研究』第２章が「実在」として、1907（明治40）年4月に『善の研究』第３章が「倫理学」として河合たちによって印刷された。

- 1907（明治40）年1月11日：十時半頃　幽子瞑す　＊了本四高二年　河合ら三年
- 1907年1月30日：今日は幽子の三七日にて僧来り読経す・・・夜河合〔良成〕来る
  午前木場〔了本〕、京極〔逸蔵〕二生来り道友会につき相談す　＊道友会=仏教青年会
- 1907年2月20日）：幽子の六七日なり僧来りて読経　・・・京極木場来り道友会へ
  五十銭出す　夜三々塾生品川〔主計〕等来る
- 1907年8月3日：（暁烏敏の依頼を受けて）『精神界』のために「知と愛」という文を草す
  ⇒『精神界』第7巻第8号に発表⇒後に、『善の研究』第4編「宗教」の第5章として収録

「実在」と「倫理学」の2冊が合本された『西田氏実在論及び倫理学』が9月からの「倫理」の受講生（木場了本の学年）のために印刷された。

石川県西田幾多郎記念哲学館（以下「西田哲学館」）の調査により、西田幾多郎の主著『善の研究』の一部の原本（初出と推定される資料）となる資料『西田氏実在論及倫理学』を金沢大学附属図書館で所蔵していることを確認した。

―2022年6月3日記者説明会用資料―



昨年4月に大分県竹田市で再発見

・1908年（明治41） 1月20日：木場来りエピクテート〔エピクテトス〕の本到着したといふ
・1908年6月22日：『北辰会雑誌』第五一号に『善の研究』第一巻前半部「純粋経験と思惟及意思」（一一二）と「東圃学兄が其著国文学史講話を亡児の記念として出版せらるゝに当りて余の感想を述ぶ」 が掲載される。　　幽子の追悼文

その頃小生の友人で京極といふのが之も塾の会の折、先生に、先生なぞは子供が死んだつて別に悲みなど無いでせう、と申したら先生は唯つた一言、馬鹿！と叱られたと云ふことを、京極が申して居りました。・・・間もなく北辰会雑誌（校友会誌）に先生があの序文を出されたので、皆読んで先生にもこんな心があるかと驚いたものです・・・それまでは単なる畏敬を持つて居たので、先生は私共には超越者であつたが、以来内在的に感ずる様になつたと思ひます。（木場了本氏より筆者宛書信） ―島谷俊三「『善の研究』の生れるまで」―

了本の第四高等学校時代：1905（明治38）年9月 ～1908（明治41年） 年7月
1907年度の「倫理」の講義ノート⇒実在論、倫理学・・・『善の研究』第2編、第3編
1907年8月10日「知と愛」『精神界』第7巻第8号・・・ 第４編第５章
1907年度）の「倫理」の講義ノート⇒西田氏実在論、倫理学・・・第2編、第3編
1908年6月22日/24日「純粋経験と思惟及意思」（未完）『北辰会雑誌』第51号/52号第１編
1908年8月10日「純粋経験と思惟、意志、及び知的直観」『哲学雑誌』第258号・・・第１編

『善の研究』成立期に第四高等学校学生として立ち会った木場了本

２． 東京帝大時代、浩々洞時代の了本

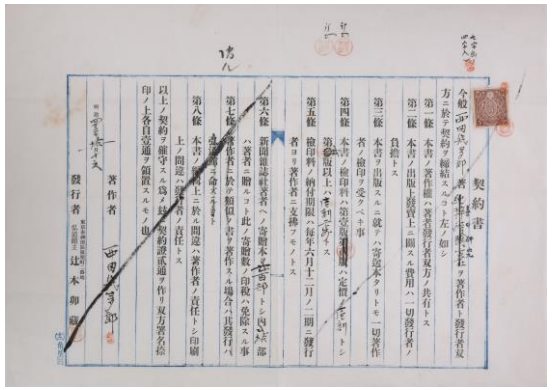
了本：1908年（明治41）７月 ：第四高等学校卒業　　9月：東京帝国大学入学

- 1909年（明治42）1月11日：けふは幽子の三年〔忌〕なり　・・・木場了本来訪
- 1909月６月29日：西田、浩々洞を訪れ、佐々木月樵、暁烏敏に会う
- 1909年7月31日：西田に学習院教授辞令　了本が浩々洞に入り、『精神界』の発行に関わる
- 1909年10月9日：佐々木〔月樵〕木場〔了本〕を招きて読経

＊1910年「日記」末尾の住所録
／西砺波郡北蟹谷村字末友木場了本／‥／ 千駄木林町一七七大谷学生会内　木場了本
＊1911年「日記」末尾の住所録
／本郷区林町一七七大谷学生会内木場了本／‥／小石川区犬塚仲町二八浩々洞　木場

- 1910（明治43）年10月16日：西田幾多郎『善の研究』出版契約
- 1912（大正元年）：了本、西教寺の住職を継ぐ

浩々洞は東大で宗教哲学を専攻し 宗門の改革を唱えた清沢満之を中心として開かれた真宗大学の学生らの私塾。1900年（明治33年）4月設立、1917年（大正6年）解散。



1910年9月12日　西田の佐々木月樵宛書簡（⑲187）

・・・尊兄始め在洞の諸兄御障も御座なく候か　本日は高著親鸞上人伝及叢書拝受致し非常に悦ひ候　上人伝の方は先日木場兄より拝借致し一読致し候が全篇敬虔の念と渇仰の情とを以て描かれ親鸞其人の人格に接する如き心地して難有感せられ候・・・多田、暁烏、木場等知己諸兄によろしく　・・・

清沢満之

1910年12月16日　佐々木月樵宛書簡（⑲190）

拝啓　其後は久しく御伺も不申在洞諸兄御変も御座なく候か暁烏君はいかん　木場君はいかにせしか　大拙氏訳の真宗要旨御送り被下難有奉拝読候　藤岡方御尋被下候由難有奉謝候いつしかはや一年の昔と相成り昨年の暮大磯に同宿して色々談笑せし事など思ひいでゝ人生無常の感慨に堪へず候　・・・東園がはかなき面影今も尚面前に見えるやうに覚え候　何卒御暇も有之候節は時々御尋被下老母特に未亡人に尊き道の話を御聞かせ被下度奉願上候　老母の方は大分に覚悟もでき居り候へども未亡人の方は中々さうはゆかずこれのみ案じ居り候　・・・

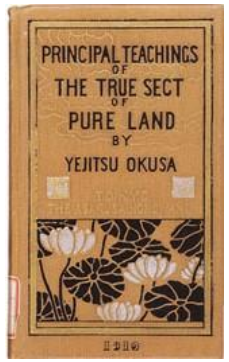
佐々木月樵

暁烏敏

三羽烏

多田鼎

了本と加賀の三タロウ、加賀の真宗の三羽烏→崇信学者

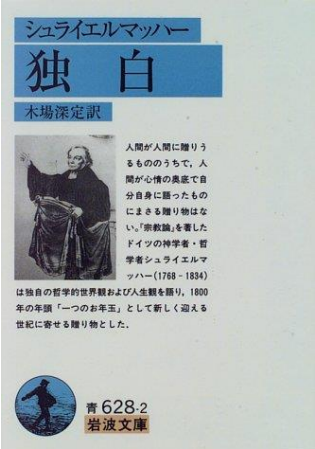


『真宗要旨』の英訳、訳者は記されていない。
（松ヶ岡文庫蔵）

３．大谷大学教授、欧州留学中（1920年10月～1923年8月））の了本

・1915(大正4)真宗大谷大学教授、シュライエルマッヘルの訳『独語録』東亜書房を刊行

序文によれば、訳者は石原訳『宗教論』を読んでシュライエルマッハーに対する関心を喚起され、『独語録』の翻訳を一九一四年五月から十二月まで雑誌『精神界』に載せ、翌年東亜書房から公刊・・・了本氏は、精神的な渇きをいやそうとしてたまたま当時出版されて石原謙『宗教論』をよんだことを告白している（佐藤敏夫「日本におけるシュライエルマッハー研究」）

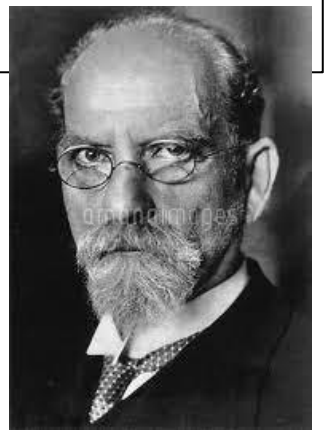


人間が人間に贈りうるもののうちで、人間が心情の奥底で自分自身に語ったものにまさる贈り物はない。『宗教論』を著したドイツの神学者・哲学者シュライエルマッハー（一七六八―一八三四）は独自の哲学的世界観および人生観を語り、「一つのお年玉」と記して一八〇〇年、新しく迎える世紀に寄せる贈り物とした。（深定訳『独白』岩波文庫のカバーの言葉）

西田は「近代宗教哲学の巨匠シュライエルマッヘル」と記している。

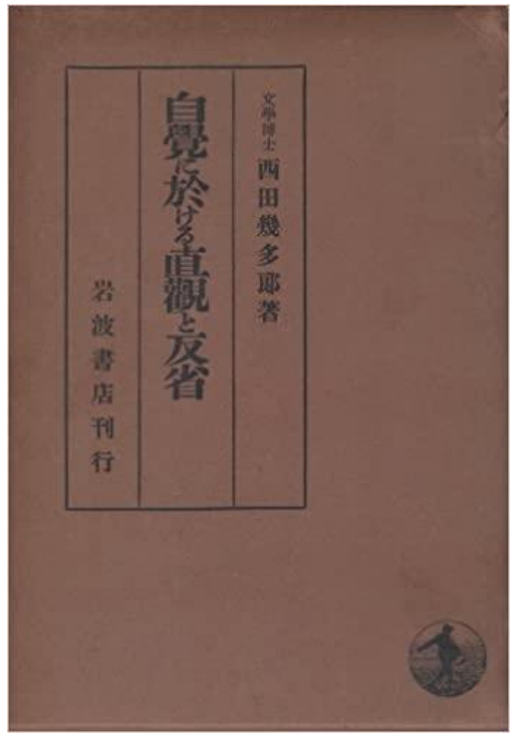
・1920(大正 9) 年10月：ドイツ・イギリスへ留学(本山より派遣) 主にフライブルク大学においてフッサール、ハイデッガー等の講義に列し、西洋哲学、宗教哲学の研究に精進

1922年当時のフライブルクへの留学生：伊藤吉之助、山内得立、木場了本、藤岡蔵六、小山鞆繪など→高橋里美は1925年から



Ｅ・フッサール
（1859－1936）

一九二三年九月十九日付で、西田はフッサールからの書簡を受け取っている。・・・・フッサールは、西田の『意識の問題』（一九二〇）と『芸術と道徳』を受け取ったことに感謝を述べた後、それに先立って木場了本から『自覚における直観と反省』をすでに贈り物として受け取り、それについて田辺元より興味あるところを伝えてもらっており、近い内にフライブルクで勉強している日本人によって西田の著作よる講義を聞く機会を見出したい旨、述べている。（浜渦辰二「日本哲学史におけるフッサール現象学の受容」『日本哲学史研究』第18号、157）



渡欧中の西田と了本の交流—書籍の購入依頼—

Wölfflin等数種お送り下さつたそうで難有存じます　毎度の御芳情且いろいろお手数感謝の至りに堪へませぬ書物は大分買ひました知人が独逸に居らるゝ中に何時まで生きるか問題ですが生涯入用と思ふ物を集め置きたいと思ふのです・・・

ヘーゲルの宗教哲学を送って下さった相でそれは誠に難有存じます　・・・Phänomenologie はいかゞですか・・・貴兄はいつまで独逸に御出ですか山内君は風邪もひきませぬか

（一九二二年）七月十五日　　木場君

・1923(大正12) 年8月、欧州各地を視察、アメリカを経て帰朝
・1924年:大谷大学専門部教授 、本願寺から擬講(ぎこう)、嗣講、講師の学階を授けられる。

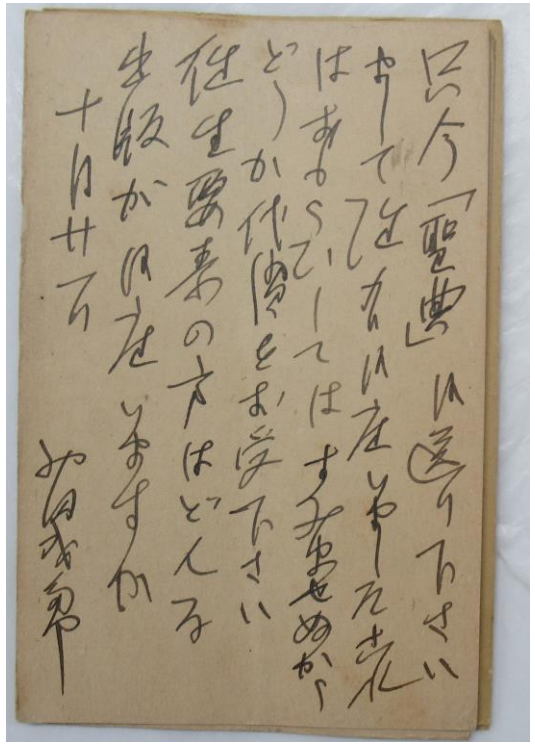
1924年1月28日「日記」:久松〔真一)木場〔了本〕西谷〔啓治〕来る 西谷は能洲宇出津のものなりといふ、三十年前能州にありし日を思ひ起こす

木場了本「オットー教授の著 Das Heilige (『聖』)に就いて」『佛教研究』6 (1)、1925.2、86-99

帰国後の西田⇔了本の交流(仏事と書籍の依頼)

・1925年1月20日 木場了本宛 (はがき)
此度は一方ならざる御世話を添ふしいろいろの御心尽し御礼の申上げ様もございませぬ 御蔭にて昨日は仙寿院の方の葬礼も相済みもはや何等の心残りもございませぬ 何卒古賀様にも厚き感謝の意を御伝へ下さい それから四十九日までの読経等万端山口様に御願いたしたいと思ひます 何卒よろしく

・1925年2月15日 木場了本宛 (はがき)
若しRickerische Buchhandrung〔リッカー書店〕に注文することができるなら・・・二書を御注文下さいますまいか ・・・



一九一三年十月月二十一日付の了本宛書簡(新資料)

真宗聖典を送ってもらったお礼、三日後に西田はそれをフライブルクの高橋ふみに送ったようだ。

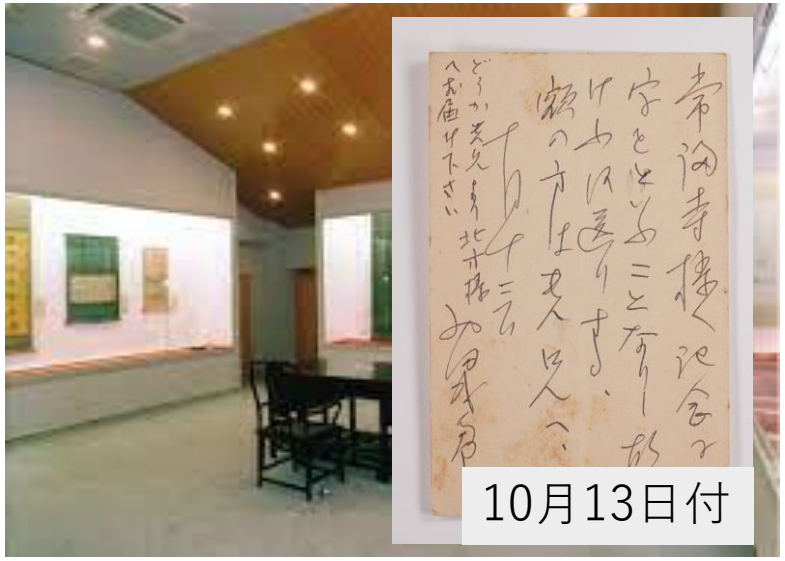
５．第四高等学校教授・了本と西田との交流

◆了本の依頼で1938（昭和13）年10月7日四高で講演「日本文化の問題」

10月６日：　琴、静と金沢に行く　小将町一二番丁常福寺北方穆氏方に宿　〔高橋〕七郎金沢まて来り迎　木場〔了本〕、石川〔龍三〕、四高の人々来　高橋為次郎、字良来
10月7日：　四高にて講演　田中鉄吉先生、市村〔塘〕君等に逢ふ　午後木場と金沢市を散歩〔高橋〕すみ木津より迎ひに来　夜木津に行き宿
10月9日：朝海浜にて魚を見る　午前十時金沢へ帰る　・・・夜ツバ甚にて宴会・・・木場・・・・

1938年10月11日　石川県金沢第四高等学校
木場了本宛　京都より

今度御地にまゐりました節は一方ならざる御厄介に相成り誠に難有御座いました　お蔭により久しぶりの帰郷も心地よく過しました　何卒皆様によろしく　特に鍔甚にお出下さいました方々や御見送下さいました方々に　御礼まで不取敢

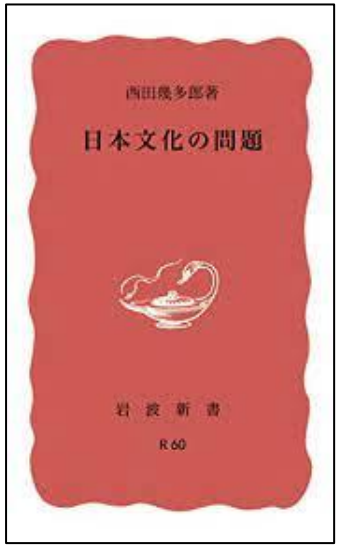


常福寺 北方心泉記念館

常福寺宿泊の記念に贈られた西田の書が展示されている

1938年11月3日　金沢市第四高等学校　木場了本宛　京都市より

原稿一覧いたしました　はじめの方は赤インキで直しましたが後は鉛筆で直しました　私の話しの下手なためどうも大事な私の考の所がよく掴まれてゐない様に思はれます　その点編輯者の言として明記して置いていたゞきたいとおもひます　・・・今春同じ様なことを京大で話しそれを京大の哲学のものが書いたものの方がよいとおもひます　大学の方にて近々の中それを印刷すると云つてゐますからその方をお送りした方よろしからずやとおもひますがいかゞ　・・・

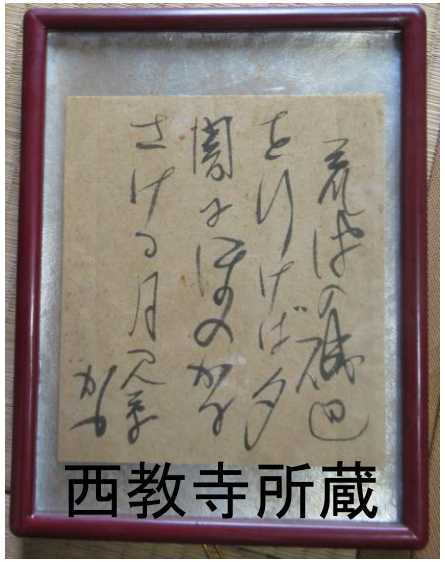


1939年9月10日　金沢市千日町裏千日町二〇　鎌倉町姥ヶ谷五四七より（はがき）

その後御無沙汰　お変りもなきか　親鸞上人の語に仏の長い修行が一に親鸞一人のためであったといふ様なことがあつたと思ふがあれはどういふ意味にて語通りにどういふのでしたか　他力信仰の深い自己憾悔の言と思ふがいかん　何書にありや
御手数ながら一寸御教示を乞ふ

1939年9月14日　金沢市千日町裏千日町二〇　かまくらより

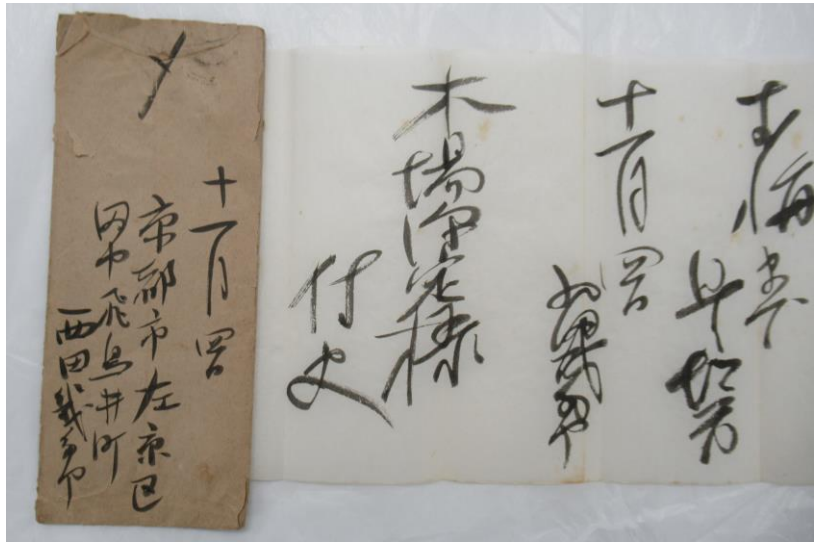
早速御返事下され委細御教示を添うし御芳情之段厚く御礼申し上げます
御多忙中誠に難有御座いました。 今年は此処も中々暑う御座います
九月十四日　　木場君机下
荒波の磯辺を行けば夕闇にほのかにさける月見草かも

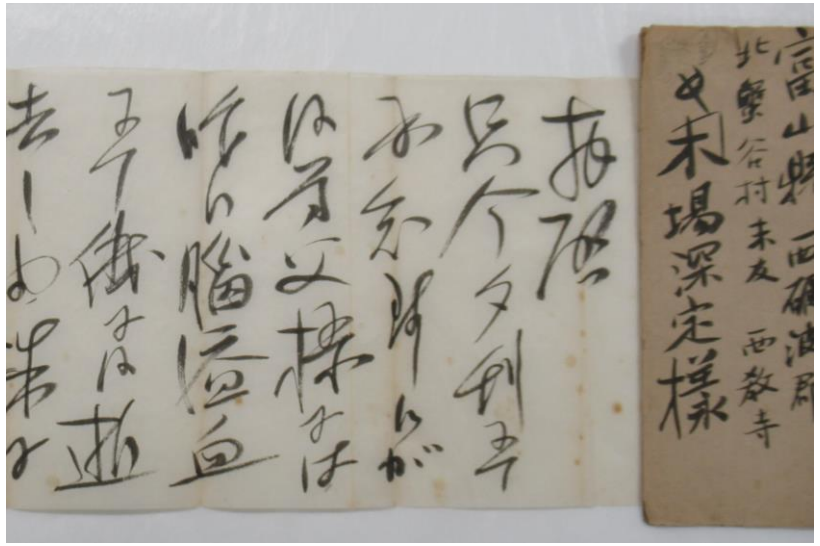


西田幾多郎の了本「お悔みの書簡」⇒深定宛

・1940(昭和 15) 年11月3日　　木場了本逝去（享年55歳）

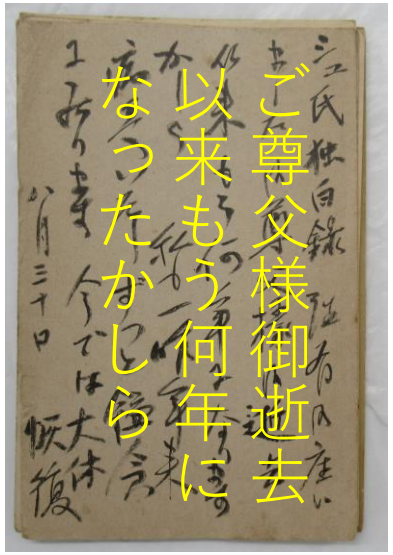
西田の木場深定宛書簡
（一九四〇年十一月三日）





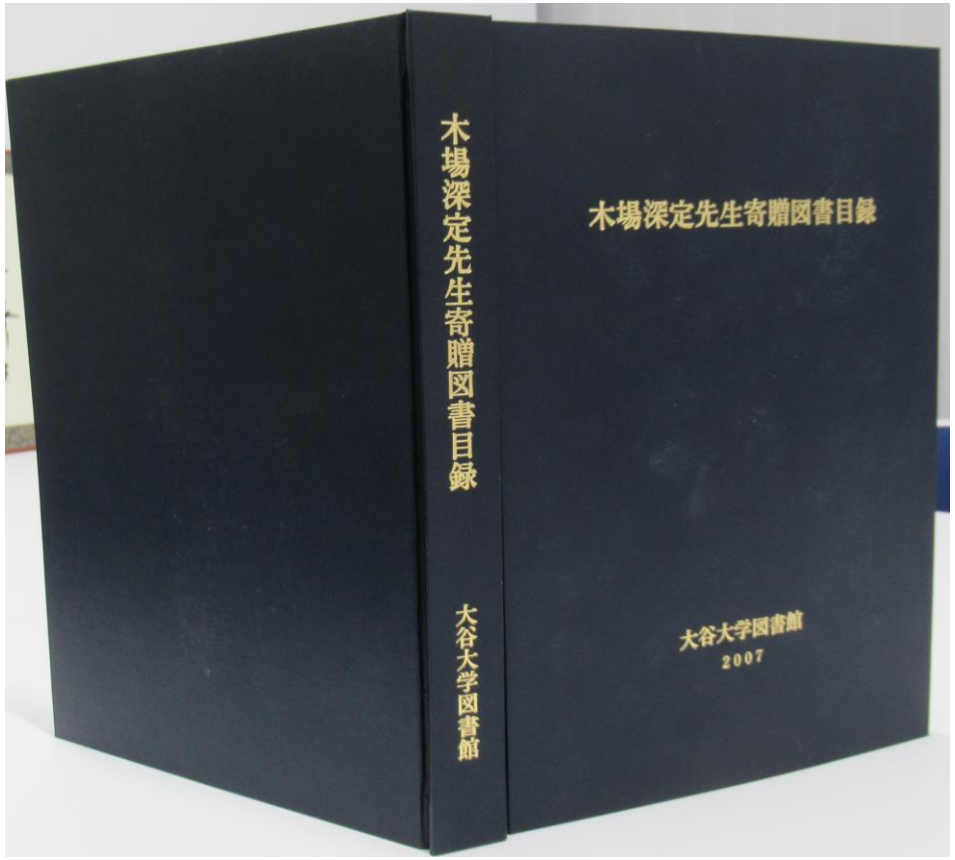
拝啓
只今夕刻にて
承知致たが
御尊父様には
昨日脳溢血
にて俄に御逝
去ノ由誠に
驚き入り　御
令室皆々様
御愁傷の程
いかばかりかと
深く御察し
申し上げ候去来
暫く御消息を
審にせず
忽ちこの訃報
に接し驚愕
しきり　在事
の御交りを思
ひ出て感
慨無量に存じ候
脳溢血などにから
れる如き御体
格とも御見
受申し居らず
候が人生は夕
も計り難き
感を深め候
先づは不取敢
お悔まで
〇〇
十一月四日
西田幾多郎

西田の木場深定宛書簡
（一九四三年八月三〇日）



ご尊父様御逝去
以来もう何年に
なったかしら

補遺:木場深定先生寄贈図書資料(大谷大学図書館)



この目録は、、1999年12月に故木場深定氏ご遺族より寄贈された同氏旧蔵書の目録である。

この目録は、故木場深定先生(1907-1999)のご遺族よりご寄贈いただいた、深定先生およびご尊父木場了本先生の蔵書の目録である。本学鈴木幹雄教授作成の略年譜を付している。

木場深定先生は、蔵書を戦災にて失われた後はご自身で書籍を所有されることなく、奉職された大学図書館等に残されたが、同じ学問を専攻された了本先生の蔵書は生涯大切にされたと聞き及ぶ。了本先生は、東本願寺の援助により約3年の間欧州に留学されたことがあり、その際に購入された書籍はいずれ宗門の大学である大谷大学へ返し、後学に委ねたいと常から仰っていたという。本書に収められた書籍は、そうした両先生のご遺志を継がれたご遺族により、本学へご寄贈いただいたものである。

‥‥蔵書と同時にご寄贈いただいた深定先生の未刊行草稿や講義ノート類からは、哲学、宗教学のみならず、学問を志す後学すべての者が、学び問うとはどのようなことか、その高邁で真摯な先生の姿に学ぶことができるであろうと確信するものである。

2007年3月16日 大谷大学図書館